



第53号 (年4回発行) 編集発行 前学委員 弘広 印刷所 (有)小野印刷所

2013年弘学祭開催される

10月13、14日に2013年度の弘学祭が「夢幻」というテーマで開催されました。今年初



日があいにくの天気でしたが2日目には晴れ、多くの高校生や近隣の方々、学生教職員が集い、

楽しいひと時を過ごしていました。

今年はスペシャルゲストとして、「青森最後の詩人」ひろやさんと西弘商店街のテーマソングを歌っているHINAさんをメインイベントとして、恒例の「学長」にもご協力していただいている「じゃんけん大会」などで歓声が上が

り、多いに盛り上がるなどサークルの発表や模擬店と、学生・教職員が協力し楽しく、賑やかな学祭でした。(詳細は4面に続く)

本多庸一とキリスト教(25)

学校法人弘前学院 理事長・学院長 阿保 邦弘



文部省訓令第十二号事件

日本は開国後、不平等条約の時代が長く続いた。

不平等条約とは、二国間の条約において相互条約ではなく、一方の国が相手国より法権・税権・最恵国待遇などの面で片務的に不利な条件を認めた条約を

いう。十九世紀に入り英国を先頭とする欧米諸国は、軍事・政治・経済的優位を背景に自由市場の開放を目指し自国人の活動を自由・安全・有利にするため、アジアなどの後進国・従属国に強制した。三本の柱があり、片務的な最恵国待遇、領事裁判権協定関税である。

領事裁判権は、外国人が在住国の裁判権に服さず、本国の法に基づき、本国領事による裁判を受ける権利。これをはじめとする外国及び外国人の領土的特権・地位を治外法権という。一八九九(明治三十二年)八月

月三日、文部省訓令十二号として、次のような訓令を発した。二一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最モ必要トス、依テ官公立学校及ビ学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルベシ。というものであった。

訓令発布の背景は、一八九九(明治三十二年)日本の治外法権が撤廃され、外国人居留地を廃止して、内地雑居が実施されることになった。これによって、外国人宣教師が多数来日し、キリスト教の宣教とその学校教育が発展して、従来の天皇制国家の教育方針が乱されることを恐

疲れは健康の証



学長 吉岡 利忠

日常生活の利便さは、なるべく体を動かさずして色々な用事を済ましてしまうことも知れません。テレビの電源のオンオフ、音量調節やチャンネル切り替えでさえソファに寝ころびながらできるし、力を必要とする仕事も極端に少なくなり、工夫された器具・機械がその役割を担っており、各戸に一台はあるという自動車の普及により歩くことも少なくなっています。

一方、一日中デスクに座ってパソコンを見ながらの仕事が増え汗をかいてやるような力仕事も少なくなっています。現代社会にありがちなあまりからだを動かさないことで生ずるこのような「疲れ」、「疲労」、「疲労現象」についてはどうでしょう。からだを良く動かし汗をかいた後の疲れとは異なる疲れであり、精神的な疲れと言っているのでしょうか。

人間は動物。動くもの、動いているもの、動かなければならぬもの、なのです。年度初めのヒロガク教養講話この講話集は本学笹森建英特任教員による「編集集中」。「私たちは何処から来てどこへ行くのでしょうか」と題して話をしましたが、人類は猿人から数十年前を辿り現在のヒトに進化した、その間ヒトは食べ物確保のため野山を駆け回り(活発にからだを動かす)獲物を得ていました。数十年前から数千年前までこのような生活をしてきたのです。地球の成り立ちから現代までを一年間に置きかえていた表を見ると今の時代は大晦日の12月31日が終わる数秒

前にあたることから、山野を駆けて獲物を追っている時代はほんの少し前と言っていることになりません。本能的にからだを動かさなければ生きていけない子孫も残せず、疲れ果てて(疲労困憊して)眠りそして次の日が来ることの繰り返し。言ってみれば疲労と休養の毎日。その頃の平均寿命は今の数分の一であり、多くのヒトはケガによる感染症などで一生を閉じたと思われれます。現代は特に予防医学の発展もあり平均寿命や健康寿命の伸びは世界一になっています。さて、「疲れはからだを守るために必要なものであり、疲れはヒト本来の持ち合わせている現象」とも表現されています。すなわち疲労はからだを守る一種の防御機構であり、これ以上無理をすることでからだは壊れてしまうという警報です。疲労は安全装置であり、疲労と健康は車の両輪とも言われています。疲労をプラス思考として考えて見ようというわけですね。

疲労とは何か。疲労を学術的な問題としてその専門学会もありますが、大別して身体(肉体)的疲労と精神的疲労になります。さらに分類すると、中枢性疲労と末梢性疲労、急性疲労と慢性疲労、局所疲労と全身疲労になり、読んで字の如く、それらの意味合いはおおよそ検討がつくと思われれます。中枢性疲労は精神疲労に、末梢性疲労は身体性疲労にほぼ対応するとしてもよいかも知れません。

疲労の特徴は、このところ多くなった知(精神)的作業や汗水を流して行う身体(筋肉・肉)的作業の結果としてからだに現れる生理現象であり、その作業を中止すると必ず元の状態に戻ることで、戻らない場合はまさしく病状。よく疲労の蓄積といいますが、慢性疲労も同じような状態であり、その状態が続くと遂には過労として過労死ということになってしまっています。過労死、この言葉はなんと日本にしかない医学用語(?!?)で、英語のつづりでも、カロウシ、と表現するようです。疲労は年齢とともに変化するものであり、10歳代では疲れを知らない程に回復が早く、50歳代以上ではこれまでの経験が物を言い、疲れの消去の仕方を自分なりに確立している人とそうでない人との間で個人差が広がっています。ですから、他人のやっている疲労回復方法は自分には当てはまらないことを知るべきでしょう。他人に無理強いすべきではないようです。疲労したら休養して元の状態に戻ればいいのであって、その回復方法は個人によって異なります。お酒を呑みながらテレビを見ながらゴロゴロしながらお菓子を食べながらは、決して疲労は回復しません。良質な食べ物と少しからだを動かす運動や散歩などは積極的疲労回復として最も良い方法だと思っています。

れ、基督教主義学校からキリスト教教育を放逐して、文部省統轄のもとに全国の学校をおこうとしたものであった。対象となった中学校は国民の上層一部の男子のみの学校で、高等教育への予備段階の性格をそなえていたもので、一九〇〇(明治三十三年)の学校数は一九四校あり教員数三、七四八名、生徒数七、八三二名であった。この中であってキリスト教主義学校は、中学校令に即して学科課程を再編成し、官公立学校と同等の資格を得るなどして苦しい時代を切り抜けた。ところが、訓令十二号によってキリスト教主義学校はこれに従いその建学の精神であるキリ

スト教教育を放棄して高等学校入学や徴兵猶予などの特典をもつ学校として存続するか、あるいは宗教教育を続けることによつて、これらの特典を剥奪され、各種学校として再び苦境の道を進むこととなるかという岐路に立たされることになったのである。

訓令十二号の発布に対して、キリスト教主義学校の代表者たちは直ちに文部当局に対して激しい反対運動を展開した。「護教」によれば「青山学院、麻布中学校、同志社、明治学院、名古屋英和学校の代表者は文部大臣を訪問すること三回、同次官及び参与官を訪問する各一回その志す所を告げて、当局の反省

を請ふた」のである。反対運動は明治学院総理事深堀之助、本多庸一が中心になって進められた。青山学院としては、翌年三月の学年末までは訓令に触れないように一時宗教教育を止め、中学校を維持して最上級生を卒業させ、それ以後は断然特典を返上し、各種学校となって宗教教育を続けていくことを決定した。明治学院、同志社、東北学院なども特典放棄・キリスト教教育堅持の方針を決定したが、立教学院その他特典維持、宗教教育中止を選んだ学校もあった。九月から十月にかけて本多、井深らは山県首相、樺山文相、奥田文部次官、岡田文部省参与など次々に会見し、陳情・請願

運動を続けた。本多たちの努力にもかかわらず、文部省の態度は強硬であった。キリスト教主義学校の苦境は深刻化した。上級学校への進学資格なく徴兵猶予の特典も認められない学校に学生・生徒は集まらなかつたばかりでなく、退学者も続出し、学校の存続さえ危ぶまれる状態となつてきた。一九〇〇(明治三十三年)四月、青山学院はキリスト教教育を続けるため中学位を廃止して新しく「中等科」とし、高等普通学部を「高等科」と改称した。そして、本多の努力は、各種学校として中学校の名義はなくとも、それと同等の特典(上級学

校入学資格、徴兵猶予)を現実的に獲得する方向に向けられていった。かくて、青山学院中等科は一九〇一(明治三十四)年五月には中学校以上と認定され、在校生の徴兵猶予の特典も再び認められ高等科の徴兵猶予も回復された。明治学院その他もほぼ前後して宗教教育を保持したまま特典を回復したのであった。こうして訓令第十二号はその当初の掛け声の大ききにもかかわらず、またその反響の大ききと文部省の強腰にもかかわらず、公布後三、四年にして全く骨抜きとなり、訓令そのものの持つ拘束性は、数年を出でずして実質的に消失してしまつたのであった。(以下次号)

研究紹介⑳

慈円の研究



丸山の一つの研究テーマは、「慈円の研究」です。

慈円は、(一一一五—一二二五年)の人。父が藤原忠通、慈円と同母兄に兼実、甥に良経。慈円は、幼少期に両親を亡くしてしまいます。その当時の常として、長男は政治の世界へ、次男以下の場合、よく仏教の世界へ行きました。慈円は、ご多分に漏れず、仏教の世界に入ります。

文学部教授 丸山 正道

を積み重ねます。生涯で四度も、そのお寺の頂点、天台座主になります。片や僧侶として、片や文学・芸術の世界で、努力に努力を重ねて、数多くの歌を詠んでいきます。生涯で六、〇〇〇余首も。又、慈円の著した『愚管抄』では、こんな言葉があります。「保元以後のことは、皆乱世にて待れば」と。この時代は、源平の世で、「乱世」であったのです。兄の兼実が、源頼朝の政治と歩調を合わせて政治を執っています。慈円は、宗教の世界で兼実と協調して歩んでいきます。甥・良経の邸宅では、『六百番歌合』が行われました。判者は、藤原俊成です。彼はこの作品の中で、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」と。この言葉は、この時代の歌人達の指標と

なっていく言葉です。

慈円のことを考える場合、少なくとも二つのことが言えます。一つは、平氏が滅亡したのが、文治元年(一一八五年)。この文治期(一一八五—一一八九年)と、その次の建久期(一一九〇—一一九八年)のころ。一つは、承久の変が、承久三年(一二二二)。この承久の変の前、建保期(一二二一—一二二八年)から慈円没年の年(嘉禄元年、一二二五年)まで。

この二つの所が、慈円を研究していく場合に、特に重要となってくると思われれます。何故ならば、それは、一つは、慈円と文学・芸術方面の世界から。一つは、慈円と宗教との世界から。一つは、慈円と政治との世界からです。慈円を研究する場合は、

2013年度 学内就職セミナー

弘前学院大学独自の企業説明会

2014年1月10日(金)

午後1時~4時まで

場所 弘前学院大学 体育館

いながらにして企業を知るチャンス!!

合同就職委員会

絶えずこの三方面的世界が問われているからです。



公開講座 「教科書には載っていない(?)コミュニケーションの話」

「教科書には載っていない(?)コミュニケーションの話」本学で開かれる

弘学祭にあわせて10月14日(月)、公開講座「教科書には載っていない(?)コミュニケーションの話」が本学で開催された。吉岡学長の挨拶が冒頭で行われた後、教員3名による講話がスタート。その内容は、小川幸裕准教授(社会福祉学部)による「ソーシャルワークの世界とコミュニケーション」

お知らせ

クリスマス礼拝 クリスマス音楽の夕べ

◆クリスマス礼拝 12月12日(木) 16時より

◆クリスマス音楽の夕べ 12月12日(木) 18時30分より

場所:弘前学院大学 礼拝堂 入場無料(整理券配布)

尚、音楽会については、本学まで問い合わせ下さい。男性合唱・パイプオルガン演奏を予定しています。



中国の病院

—宁夏医科大学附属医院を見学して—



看護学部 講師 齋藤美紀子

2013年7月31日から8月4日まで、中国の宁夏回族自治区银川市にある宁夏医科大学附属医院および宁夏人民医院を見学した。訪問で知り得たことについて、ごく一部を紹介したいと思います。

宁夏医科大学附属医院は巨大な病院で、広い構内に複数の診療科の入院棟が集まって病院団地を形成していた。中でも十年前に建設された外科棟は二千床を有する巨大な建物で、その大きさに驚いていると、「中国ではこれが普通」とのこと、人口と国土の規模の違いを改めて実感させられた。小児科病棟は二か所見学した。一つは主に腎臓病の病棟で、もう一つは呼吸器感染症が中心の病棟であった。どちらも六十床ほどであり、六人部屋と二人部屋、個室があった。日本との違いを感じたのはベッドで、Uを見学し、宁夏人民医院では小児科外来と小児科病棟、および薬剤部などの部署を見学した。

談話室

弘学祭協賛

「しあわせの国ブータン紀行」

写真展を終えて

看護学部 教授 片桐 康雄



数年前から弘学祭で私の写真展を開くのが恒例となっている。九年前に弘前学院大に赴任してみると、キャンパス祭が屋台だけが目につき学生中心の寂しいイベントに見えた。写真展を催して少しだけ盛り上げられたらという思いがあった。今回は「しあわせの国ブータン紀行」と題して、今年六月に訪れたブータンの写真を展示した。ヒマラヤの小国ブータンは九州よりやや小さな国土に七十四万人が暮らしている。二年前に来日したワンチュク国王のもと「国民総幸福度、GNH」を目標に国づくりを進めているというだけあって、道で会う老人や子どもたちはみなニコニコして出迎えてくれた。本当に幸せそう。子どもたちの瞳がキラキラ輝いている。日本にもこんな時代があったように思っ

た。仏教国だけあって自然を大切にしており世界遺産級の歴史的な僧院や王城などを撮影することができた。そして日本では見られない貴重な鳥たちにも会い、その写真を撮ることができた。ブータンでは俗化することを嫌い、あえて世界遺産には登録申請は行わないのだという。経済ではしあわせは買えないという選択をしているだけのことはあるなど大いに感じ入った。二日間の展示で記憶してくれた人が百人を越えた。七十人は学外の人だった。その中で弘前高校の私の同期生が十二名も来てくれたことが嬉しかった。毎年、「先生の写真展を楽しみに



写真展にご協力いただいた弘学祭実行委員の学生諸君および総務課の方に深く感謝申し上げます。

宁夏回族自治区は中国の西北部に位置しており、十一世紀から十三世紀にかけて西夏王国が繁栄した地域である。首府の银川市は人口が約百三十万人であり、市の北側には黄河が流れる乾燥地帯で、日本にも飛来する黄砂のふるさとでもある。銀川では二日間にわたって宁夏医科大学附属医院と宁夏人民

病院を見学した。宁夏医科大学病院では小児科病棟二か所、NICU、成人外科系病棟、ICUを見学し、宁夏人民医院では小児科外来と小児科病棟、および薬剤部などの部署を見学した。



患者さんと一緒に



宁夏人民医院

# 在宅療養を受けている

## 小児と家族への支援

看護学部 四年 高橋 智子



私が小児看護学実習で受け持った患児は、母親と祖母が交互に付きそいながら治療や看護を受けていました。しかし、在宅では様々な社会資源を活用しながら家族が中心となって世話をする生活になります。そこで、看護統合実習では、小児の在宅療養を継続する上での家族の抱える身体的及び精神的

# 地域の人々の健康を支える

看護学部 四年 榎 麻衣



地域保健における「健康教育」とは、個人・家族・集団または地域が直面している健康問題を解決するために、一人ひとりが健康を管理し向上していきけるよう働きかけることです。

統合実習では、昨年の地域看護学実習よりも密に地域住民と関わることができ、先生のご指導のもと、地域との事前打ち合わせから実施後の挨拶まで、認知症をテーマとした健康教育における保健師活動の一連のプロセスを学生が主体となって行いました。

対象地区に適した支援の基盤となるのは、地区の把握と住民とのコミュニケーションであることと実感しました。地区の把握とは健康問題だけでなく、例えば人的組織を知ることでも大きな要素です。

行し、患児の身体状況の観察や沐浴、ガーゼ交換などの処置を行わせていただきました。主な介護者である母親は、患児以外の子供の世話や家事も行わなければいけないため、訪問看護師がどの様な役割を果たすのかを学びたいと思いました。

今回の看護統合実習で受け持った患児は、およそ3年近く病院で医療処置などの援助をうけ、在宅に移行してきました。在宅への移行の準備として、母親は、様々な介護技術を看護師から指導を受けていました。しかし、在宅の場での沐浴の援助は、母親と一緒に父親も協力して行われていました。私は、訪問日に看護師と一緒に同

の確保など病院との連携についても説明を受け学ぶことができました。

今回の実習では、利用者の方から相談される場面は経験できませんでしたが、在宅で患児が療養を継続する上で、家族が不安に思うことは、経済面の問題も予測されます。障害者総合支援法や居住する地域の乳幼児医療助成制度、病院の通園事業などの社会制度や資源の知識や情報を解りやすく提供し、療養者や家族の経済的負担や不安の軽減を図っていくことが大切であることを学びました。これらの看護統合実習での学びは、小児看護学以外においても、今後臨床で看護師として働く際に活かしていきたいと思えます。

# 精神保健福祉士実習を終えて

社会福祉学部 四年 向中野 永



私はこの実習を通して「自分の弱さと向き合い、それに立ち向かっていく事が出来た」と感じている。と言うのも、私には2つの癖があったからだ。1つは、これまで身に付けた「知識や経験」で物事を判断してしまい、何事も自己満足で済ませる事である。もう1つは、場面を意識しないで、よく「笑ってしまう」事である。前者は、自分の視野や物事への捉え方をつまらなくしている事に気付いた。後者は、本来ならば楽しい時に笑顔を見せるが、私の場合は

「自分がピンチになった時や」この場を切り抜けた」と感じた時に自分を守る為に見せてしまっていた。その為に、いざ当事者(ここでは精神障がい者の事)の方と話をしても上手くやり取りが出来ず、苦しい毎日が続いた。しかし、自分の弱さに目を向けて立ち向かい続けたお陰で、自身の課題も見えてきた。例えば、「当事者の抱えている「心の痛み」を自分の中に落とし込んでいるのか?」、「当事者を自分と同じ人間として捉えているのか?」、「自分は心にくもりが持っていないだろうか?」というものである。きつと、「当事者と人としての関わりが無い」と、心の痛みは落とし込めない。そして、落とし込むには心のゆと

# 社会福祉実習の感想

社会福祉学部 三年 奥崎 萌美



私は、8月13日から9月12日まで青森市雲谷にある、情緒障害児短期治療施設「青森おおぞら学園」で実習をさせて頂きました。情緒障害短期治療施設には親の虐待や、幼い頃に親を亡くしてしまい、心のどこかに躓きを抱えている子どもたちが入所しています。自分

の気持ちを上手く表現できずにイライラしてしまう子やかまってほしくて自傷行為をしてしまう子、対人関係に苦手意識をもっている人と話すことがあまり得意ではない子など、それぞれ様々な事情を抱えています。

に悪いイメージしか抱くことができず、私には、小学6年の弟と高校3年の妹がいます。施設にいる子どもたちも妹や弟と同じ、いたって普通の小学生や中学生、高校生だと思いました。けれども、自分の気持ちを上手く表現できなかったり、かまって欲しいけどどうすればよいか分からないといった心の躓きが子どもたちのどこかにあるんだと感じました。

実習中には、青森県中央児童相談所と児童発達支援センターやまぶき園に見学に行きました。児童相談所は児童に関する相談機関の中心となっています。

青森県中央児童相談所には、「一時相談所」というのがありました。生徒達と関わる中で、教師は生徒と友達ではないので、ちゃんと教師と生徒との一線を引く大切さを知りました。

国語の授業をするにあたって、まずは生徒に興味を持たせるような授業をすることを重視しました。他にも机間巡視を必ずすること・漢字の書き順を正確に、文章の読み間違いをしない・一番後ろの席の人にまで聞こえるように大きい声でハキハキと話すこと・板書は色使いなどをして見やすくし、何処が重要なかを生徒にわかりやすくすることなど基礎的なことをしっかりと行えるように心がけました。この4つはできないと教師は務まらないと自分に言い聞かせ、必死に練習しました。実際に生徒に授業を行ってみて、50分という短い時間の中で、生徒に自分の伝えたいことを伝えなければならぬという責任の重さを知りました。また、自分が授業をしたところがテストの問題となるので生徒にきちんと理解させなければなりません。そこで、生徒に自力で問題を解く力をつけさせるためには、どう授業を工夫して展開していくかなど、授業に対する考えが深まりました。

# 教育実習を終えて

文学部 日本語・日本文学科 四年 越後 駿



私は、5月13日から6月7日までの4週間、母校の秋田県にある学校法人敬愛学園 国学院高校で教育実習をさせて頂きました。母校なので、私が通っていた頃の先生方がいらっしやいました。先生方も私のことを覚えていてくださったのでコミュニケーションをとるのに苦労はありませんでした。これも必要である。これが出来て初めて人を支援する事を考えられるのではないだろうか。

よく「精神保健福祉士(以下PSW)の専門性とは?」という話になる。勿論、その中には専門的な知識や面接技法等もあると思うが、私は「自分自身を磨いていく事」も含まれると考える。PSWは医療行為が出来ないし、介護技術も持ち合わせていない。つまり、

た。生徒達と関わる中で、教師は生徒と友達ではないので、ちゃんと教師と生徒との一線を引く大切さを知りました。

国語の授業をするにあたって、まずは生徒に興味を持たせるような授業をすることを重視しました。他にも机間巡視を必ずすること・漢字の書き順を正確に、文章の読み間違いをしない・一番後ろの席の人にまで聞こえるように大きい声でハキハキと話すこと・板書は色使いなどをして見やすくし、何処が重要なかを生徒にわかりやすくすることなど基礎的なことをしっかりと行えるように心がけました。この4つはできないと教師は務まらないと自分に言い聞かせ、必死に練習しました。実際に生徒に授業を行ってみて、50分という短い時間の中で、生徒に自分の伝えたいことを伝えなければならぬという責任の重さを知りました。また、自分が授業をしたところがテストの問題となるので生徒にきちんと理解させなければなりません。そこで、生徒に自力で問題を解く力をつけさせるためには、どう授業を工夫して展開していくかなど、授業に対する考えが深まりました。

す。最初は、一時保護所にいる子どもたちは暗く、対人恐怖があり、警戒心が強い子たちばかりだと思っていました。しかし、子どもたちは思った以上に元気で、本当は辛いはずなのに、と虚しい気持ちになりました。

私は、1ヶ月間青森おおぞら学園の子どもたちと触れ合いました。虐待を受けてきた子が多かったため、初めはお互いに警戒していたけれども徐々に気持ちを近づけていくことができました。そして、実習では、改めて「親」という存在の偉大さを知ることができました。今後は、この経験を生かして自分の夢に向かって努力していきたいと思えます。

また、国学院高校の学校行事である「歩こう会」という行事に参加しました。この行事は健やかな身体と精神を磨こうという目的で毎年2回あります。もちろん私も国学院高校に通っていた頃、歩こう会に参加していました。学校から往復約26kmを完歩します。だいたい、午前、午後13キロ歩きです。とても疲れましたが、生徒達と会話しながら歩いたので、とても楽しかったです。

この教育実習は、教員免許取得のために行うものとなっていますが、私は1人の人間としても必要なことを学ぶことができました。ビジネススマナーや場合に応じて臨機応変に対応する行動力など大切なことを学ぶことができました。おそらく教職をとっていないけれども、この様な経験をすることはなかったと思います。四週間という短い期間でしたが、私のこの先の人生に間違いなくプラスになるものだと思います。この経験を活かし、自分の人間性を豊かなものにしていこうと思います。この貴重な体験をさせて頂いた国学院高校の皆さまに深く感謝したいと思います。

